

# 「好奇心は若さの証拠」はいつに

2023年1月13日  
学長 田林暁一

題目の「好奇心は若さの証拠」という言葉は、英語で表わすと「Curiosity of a sign of youth」となる。この様な表題にした理由は、日本生産性本部のレジャー白書によると、余暇の過ごし方に変化がみられてきたというデータに基づく。外食、ドライブ、カラオケ、スポーツ、映画鑑賞、登山、魚釣り等、91種の活動のうち15歳以上の日本人が1997年から2017年までの10年毎、及び新型コロナウイルス感染期間中の2021年に1度でも楽しんだ平均種目数は下記表の様であった。1人当たりの平均参加種目数は1997年の17.8種目から20年後の2017年には11.7種目と約6種目減少し、2021年には9.7種と2017年と比較すると2種減少していた。特に遊び盛りの10代では1997年の21.6種目から2017年には12.8種目と大きく減少していたが、2021年は13.8種目と1種目増加していた。上述の結果の特徴的な点は特定の活動に参加する傾向と時間の使い道を絞り、本当に好きなものにお金をつぎ込む姿が浮かぶ事と、以前のように広く浅く多くの趣味を求めるといった傾向は少なくなっている現状であり、つまり、若さと好奇心に変化が見られてきている事を示唆している様に思われる。特定の活動としては、携帯電話、ゲーム機そしてインターネットに費やす時間が多く、後半生を屋内外に最低1つずつの趣味が必要とされる原則に、反する様に思える。開高健が「知的経験のすすめ」で「現代人は頭ばかりで生きることをしいられ、自分からもそれを選び、それだけに執して暮らしています。部屋の中で寝てばかりでいなくて立ちなさい。立つことです。部屋からでることです。そして何でもいい、手と足を使う仕事を見つけなさい」と述べているが、特に若い時代はぜひ参考にしてほしい。また、2017年から2021年の変化は新型コロナウイルス感染症の影響であり、全体として2種目減少したが、10代では1種目増加しており、この結果も若さと好奇心の関係を示しているのだろう。

学生、および社会人にとって重要なのは対人関係で、その関係は対機器相手、孤立的活動からは得られにくいものである。また、多くの趣味を経験する事により、その中の趣味を他人と共有する機会が増える事にも連がり、多くの人々との意思疎通を拡大する一要因にもなる可能性もある。いずれにしても、これからの社会人として頭脳明晰より広い世界観を持った人が求められているという事の自覚が肝要である。

表. 平均参加種目数の推移

調査年	1997年		2007年		2017年		2021年	
	全体	10代	全体	10代	全体	10代	全体	10代
平均参加種目数	17.8	21.6	14.5	15.6	11.7	12.8	9.7	13.8

(公益財団法人 日本生産性本部 レジャー白書)